

顕著な変化が見られるぶどうの主要品種と輸入

研究員 福田彩乃

1 より高価格な品種に生産がシフト

ぶどうの結果樹面積は2000年の20千haから17年の17千haへ、出荷量は同期間に218千トンから162千トンへと減少し、生産基盤は縮小傾向にある。

ぶどう栽培は作業の機械化が困難で、労働集約的性格が強いため、1戸当たり平均栽培面積は、00年の34aから15年の40aへとわずかな拡大にとどまっている。したがって、ぶどう農家は規模拡大による収益確保が難しく、主に価格や栽培の難易度を加味した品種選択に取り組んできた。

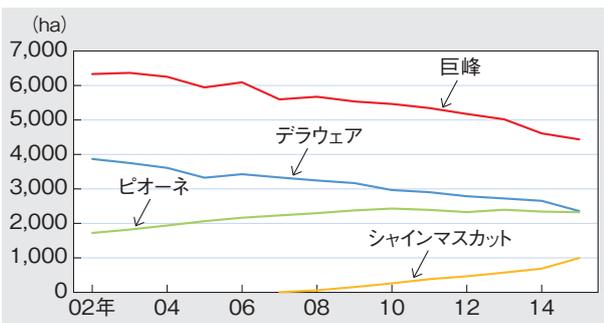
主要品種の栽培面積の推移を見ると、データを遡ることができる02年は巨峰、デラウェア

ア、ピオーネの順に面積が大きかった(第1図)。ピオーネは価格(当時の卸売市場価格、735円/kg)が他品種(巨峰666円/kg、デラウェア645円/kg)よりも高く(第2図)、その後は徐々に面積が拡大した。

07年に栽培が開始されたシャインマスカットの価格は、統計で把握できる当初から高く(12年、1,257円/kg)、一貫して上昇している。近年、主要品種の価格も上昇傾向にあるが、価格差は依然として大きい。また、従来品種と比べて栽培が比較的容易なこともあり、シャインマスカットの面積は急拡大している。

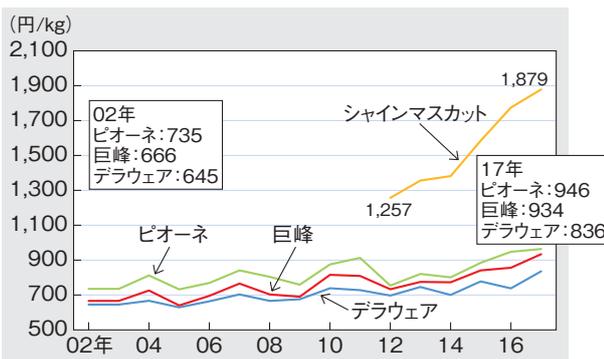
需要面でもシャインマスカットは大粒、種なしで皮ごと食べられる簡便性が受け、子供や高齢層の消費が拡大したと見られている。また、贈答用需要や香港・台湾を中心とした輸出も拡大している。

第1図 主要品種の栽培面積の推移



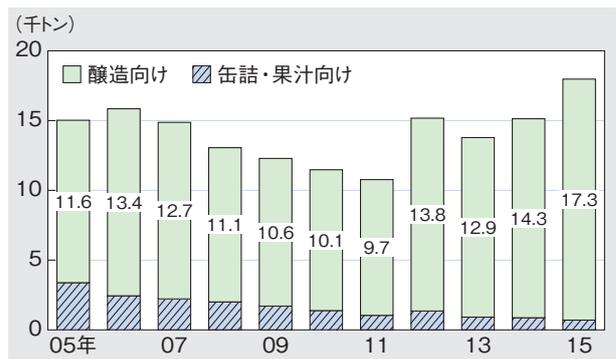
資料 農林水産省「特産果樹生産動態等調査」

第2図 主要品種の卸売価格の推移



資料 東京都中央卸売市場「市場統計情報」

第3図 国産ぶどうの加工仕向け量の推移



資料 第1図に同じ

は17千トンとなった(第3図)。

日本のワインに対する国内外での評価向上を受けて、国産のみを原料とした「日本ワイン」を製造するため、新潟、山梨、福島、長野等でワイン向け品種と生食兼用品種の栽培面積が拡大している。

3 輸入が消費下げ止まりに寄与

生食向けは、ほとんど国産であったが、変化が見られる。シャインマスカットの登場により、同じく種なしで皮ごと食べられる輸入ぶどうが09年頃から増加している。特に14年のオーストラリア産輸入解禁を受けて輸入量は大きく増加し、16年以降は30千トンを超えている(第4図)。

新聞報道等によると、一部スーパーは主要輸出国のチリ、アメリカ、オーストラリア産を取り扱うことで、国産の出回り時期を除き、通年販売を行っているという。個食化に対応した少量販売など、販売方法の工夫や手ごころな価格が特徴である。

アンケート^(注1)によると、消費者は見た目よりも割安感、ライフスタイルの変化に応じた少数個入りを重視しており、輸入取扱増加は消費者ニーズへの対応が大きな要因である。

輸入増大の影響もあり、1人当たり年間購入量は08年から800g前後で推移しており、消費の下げ止まりが見られる(第5図)。

4 今後の国内生産の方向性

シャインマスカットの栽培面積は毎年2割以上のペースで拡大している。苗木の定植から収穫が本格化する数年後には、一層の出荷

(注1) 詳細は、(公財)中央果実協会の「平成29年度果物の消費に関するアンケート調査報告書」を参照。

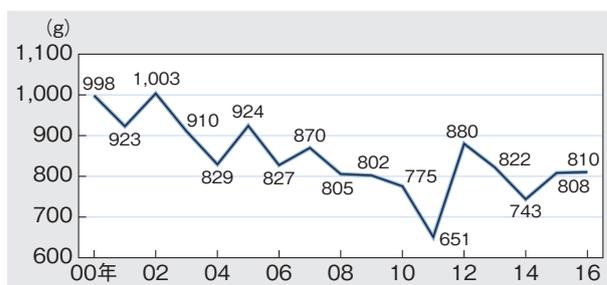
(注2) 11年は、国内主産地での大規模雪害で大幅に供給量が減少したことに伴い、購入量も減少した。

第4図 生鮮ぶどうの輸入量の推移



資料 財務省「貿易統計」
 (注) 国内の推定生食出回り量は、生食、専用、兼用品種の収穫量の合計から加工仕向け量を引いて推定した国内の生食仕向け量に、輸入量を足したものの。

第5図 ぶどうの1人当たり年間購入量の推移



資料 総務省「家計調査年報」
 (注) 2人以上の世帯の全国平均値。

量増大に伴う価格下落が懸念される。また、国内の推定生食出回り量に占める輸入の割合は1割を超えており、ぶどうの主産地では、一部で今後の輸入動向を危惧する声も聞かれる。

近年の価格上昇でぶどう生産者の経営状況は改善が図られていることもあり、一部では積極的な事業展開を行っている。具体的には、従来の露地栽培や主要品種で経営の安定化を図るだけでなく、ハウス栽培による早出しや、新しい品種を求める消費者のニーズに対応した希少品種の導入など、一層の高付加価値化に取り組んでいる。

こうした生産者による挑戦をサポートすべく、JAも包装作業にかかる負担軽減に資するパッケージセンター導入や、贈答需要が高まる秋冬までの長期出荷を可能とする貯蔵施設導入など、生産維持、所得拡大を見据えた様々な取り組みを広く見つつ、検討する必要があると考える。

(ふくだ あやの)